

熟年土木屋の ボランティアグループで活動

「シビル(土木civil)ベテランズ&ボランティアズ」、略して「CVV」は、現役を退いた熟年土木技術者たちのボランティアグループです。1998年に決起集会を開き、現在登録会員は約100名。その事務局長を務める金山正吾さんは、「僕の人生はこれから」と語ります。



CVV主催の「子どもいきいき体験事業」



今回の元気シニアは
かなやましょうご
金山正吾さん(70歳)

土木技術の知識と 経験を生かす

現役時代は大阪市ですつと地下鉄建設に携わってきた「土木屋さん」。大阪大学工学部に学び「社会の礎を創りたい」と大阪市に入庁。地下鉄御堂筋線を手始めに、数々の事業に取り組んできました。なかでも中央線は大阪では初めての高架の地下鉄ということで、設計の基準作りから任せられ、やりがいのある仕事でした。現場の監督を務めた時は、地域の人々から寄せられる工事の苦情に対応するのが大変だったそうで、「精神修養の時代」だったと金山さんは言います。

57歳で市役所を辞めた時は、「正直なところ、やれやれという心境。職場の仲間はみんななそう思っていたようです(笑)。常に市民の視線があるから間違ったことはできないと、緊張感の中で仕事をしていましたから」。

その後、建設会社、専門学校講師などを経て、今はCVVの活動が生活時間の3分の1を占めるほどに。CVVには創立時から参加し、独自のイベントを開催するほか、行政主催の土木イベントで子どもたちの指導をしたり、建設トラブル解決の相談活動を行っています。

公共事業反対運動が起きる一番の原因は、行政と住民のコミュニケーション不足だと痛感している金山さん。技術者、行政マンとしての経験を生かし、双方の橋渡し役になりたいと語ります。CVV事務局長としては、PRと、イベントの集客が目下の課題。人集めの苦労はありますが、メンバー一人

ひとり自由が自由に企画して活動できる面白さを感じています。

勇気を出して 「Shall we ダンス?」

地元自治会の事業部長としても多忙。自治会では「改革派」として、時代に合った組織に変えようと、仲間たちと取り組んでいます。

自治会活動がきっかけで知り合った地域の友人たちとは、月2回は飲み会や日帰り温泉巡りを楽しむ仲。老若男女を問わず、地域の大勢の人と付き合い、交友関係を広げられるのは、現場監督の時に、立場の違ういろいろな人とコミュニケーションをした経験がもとになっていると振り返ります。

ところで、金山さんには、武骨な土木屋さんらしからぬ趣味があります。実は地域のコミュニティ推進協議会の中にあるソーシャルダンスサークルのリーダーでもあるのです。定年後、奥様に勧められて始めたダンス歴は10年。「腕を上げないと、パーティーで女性を誘えない。男はつらいですよ。しかし、一人で練習してもうまくならないので、勇気を出して誘います。ダンスは度胸勝負ですね」と笑います。

市役所のOB会はあまり顔を出さず、もっぱら地域やダンスサークルでできた友達との交友を広げています。「今さら仕事仲間が集まって昔話をしてもうすんねんと思いません。新しい友達との付き合いのほうが楽しい。市役所時代は準備期間、僕の人生はこれからですよ」。